
New World 外伝 『Another World』

モチゴメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

New World 外伝 『Another World』

【Nコード】

N2720Z

【作者名】

モチゴメ

【あらすじ】

MMORPG《New World》

その世界に限りなく近い世界に転生する事になった主人公がいた。

だが、まさか、それがたった一人ってなわきゃねーだろうが！

男は世界をかける。外道に非道に修羅道に。

約束を果たすために。そして何よりも、己の復讐を果たすために。

山あり谷ありチート無し！？ダメ人間の、痛快ロマン復讐劇。

（この作品は池宮樹さん原作の『New World』のスピンオフとなっております。ご本人の許可と協力を頂いて書かせて頂きました。できるだけさくつと読めるような作風にしたいと思っていますので、ご指摘等お待ちしております。）

プロローグ（前書き）

という訳で。書いて見ました、二次創作！
お目汚しで失礼ですが、もし良かったら読んでみてください。

プロローグ

嘘だ。

嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ、嘘だ！

いきなり立ち上がったからか、立ちくらみ。真後ろに向かって倒れる椅子の音が遠く聞こえる。

平日の午後二時。陽光の入らないカーテンで閉めきった部屋。ワイド画面のブラウン管ディスプレイに照らされたその四畳半。

床一面に即席麺やコンビニ弁当のゴミが散乱し、ゴミ箱からは丸まって変色したティッシュが溢れている。

そんな、あるいみで生活感のあふれる部屋で、一人の男が汚れた長髪越しに光源となるメールの受信箱を覗いている。色濃い隈の浮かんだ臉を見開き、充血した瞳は瞬き一つしない。節くれだった長い指と汚い爪で頭皮を、頬を掻き毟る。痩せこけて土気色とも青白いとも言えないような色の肌の上に、赤いミミズ腫れが走る。目鼻立ちを整っているのだが、長らく手入れを怠っているのだろっ。見る影もない。

おかしい。

どうしてこうなったんだ？

「……ア、……っ！……！？」

男はとっさに声をあげようとして、声帯がうまく動かないことに気がつく。それはそうだ。覚えている限り、ここ数年誰とも「話して」いない。「温めますか？」にも頷くぐらいだ。

長いことディスプレイに固定されていた視点を、散らかった卓上に走らせる。いきなりピント距離が変わってぼやけるが、それでもなんとかマウスを探し当てるとカーソルを走らせる。

高解像度のレーザーマウスは感度が最大に設定しており、ほんの少し動かすだけで画面の端から端まで一気に動く。それが災いしてか、震える手では中々そのアイコンに合わせることができない。

やっと合わせることが出来ると、そのアイコンを押す。

もしかしたら、という希望を持って押しこむ。頼む、頼む。そう願
いながら、しかし何処か諦めている自分がいるのが悔しい。

変わらない。

再び、変わらない。

5

[illegible]

from:株式会社FNW「New World」運営委員会
to:August-Burns-Red.0801@gmail.com
l.co.jp
title:迷惑行為に関する通知

重大な規約違反を確認しましたのでプレイヤー「オーガスト」のアカウントを永久停止処分とさせて頂きます。

違反内容：他のプレイヤーに対して悪質なハラスメントやPK等の嫌がらせ行為を繰り返し働いていたもの。

無機質な文面一つで、ハンドルネーム『オーガスト』こと木山幸の
キヤマコウ
 費やした四年半は水泡に帰した。

結局、ここでもこうなのか。逃避で始めたゲームからも逃避したくなるという、ありえないほどの矛盾に苛まれて、彼は力なく座り込んだ。

オーガスト。

赤い髪が特徴的で、一部では「八月紅葉」などと呼ばれていたりもした、Sグレードのソードマスター。人数こそ十名にならないくらいプレイヤーキラーの小規模なものだが、PKギルドの急先鋒として名高い「八月一日」のリーダー。一対一でのPVPでの勝率八割を誇る、高額賞金ヘッド首。ただ、それだけ。よくいる熟練プレイヤーの一人だ。

だがそれであっても、木山幸にとっては、現実では不可能な、自分の内面をさらけ出した、現実の自分以上の『自分』だった。

自分が殺されたような虚脱感が彼を襲う。足元がふらふらとして、眩暈がする。水からのアイデンティティを、レゾナートルを確立できない人間とはここまで不安定な者なのだろうか。脳裏に様々なゲームでの情景が思い浮かぶ。決してのどかな記憶ではなく、狙い狙われて過ごした気の抜けない日々。その最中。くぐもった吐息を吐きながら、ぼやけた頭で思考する。一体どこから間違ったのか。そんなことを考えていると、つい一ヶ月前、大敗というのも控えめなくらい打ちのめされた戦いを思い出した。仲間には止められ、しかし強行に決断したあの仕事。

その標的だったのは……「十七人の賢者」

そうだ。あいつだ。アイツらだ。間違いない。アレからいきなりに、急激に、雪だるま式に悪い方へと転がり落ちたのだ……仲間には裏切られ、BBSでは叩かれ、そして最後にはこんなふうにに殺された。そうだ。彼奴等が行けないんだ。アイツらが。アイツが……！！

「t、トリs……スメg、ギs……スト、ス……パラKEラ、すす……ばらけらすす……！！」

怒りに、か細いからだが震える。長らく使っていなかった声帯を震えさせ、軽く咽せる。頭の片隅にどこか引つかかるものが有ることは分かったがそんなものは今は捨て置く。憤怒だ。全身の血液が氷水に変わったかのように冷え切った身体に、熱く黒いものが渦巻く。

「……っ」

骨の浮き出た拳で、パソコンを殴っていた。大きな音を立てただけだった。そしてそれを繰り返す。何度も。何度も。

カバーが外れて、軽い音を立ててカップヌードルのカラの中に落ちる。光学ドライブがひしゃげる。赤い滴が、ヌラヌラと垂れる。

基板がさらされて、CPUとファンが姿を表してもその拳止まらない。

「■■■■ア■■■ッ!」

声にならない悲鳴と、骨とパーツがぶつかる歪な音が部屋の中に木霊して、部屋の中に満ちる。

マザーボードを殴って、皮が破けても止まらない。機械音を出して、パソコンがその機能を止める。

No Signal

そう表示されたディスプレイに、拳が当たる。亀裂が走り、光量を遙かに落とした部屋の中に歪な影が落ちる。打ち付ける度にその影は歪さを増し、そしてついには破碎音と共に、光量を失う。その瞬

間。

ふと、目の前にも同じメッセージが表示されたような気がした。

見渡すかぎり、何も無い。最初にわかったのは、左右の反転した半角のカタカナ。ローマ字や算用記号、いつぞや本で見たヒエログリフらしきモノまで混じっている。そんな統一感のない歪な文字や記号の羅列が、黒い視界の中を走り回っている。速度も大きさも、ラウンド。

それ故に遠近感を感じられないため正確には分からないが、直感的に「大きな球体の真ん中に浮かんでいる」らしい。

そんなモノの中に、足元に何も無いというのに直立している。それなのに不思議と不安は感じない。それどころか、先ほどの寒気に似た感覚が徐々に溶けていくような気がした。

逆に奥の黒く渦巻くものはその熱量を増したようで、ひどく暑かった。

「ん？ ああ、起きた？ おはよう、お兄さん」

頭上から声がする。ひどく甘ったるく、しかし人のものと思えないぐらいに冷たい声。砂糖菓子で作ったナイフのようだ。

声の主を探すように視線を動かす。だが、見上げても見回しても視界に移るものは変わらない。分かったのは声の正体ではなく、ここが球ではなく円柱だということだけ。何の役にも立たない。

「ああ、こっちこっち。改めておはよう。お兄さん」

「だッ！？……誰だ、お前」

慌てて視界を前に戻す。声が出ることにまず驚いた幸の目の前には、少女がいた。酷く幼気な顔つきと、それ相応な身長。だが相反するような自己主張の激しい肢体。胸元と太もも大半が露出した衣装。それは、目のやり場に困るといふようなものではない。暴力的とも言えた。全裸のほうがまだ健全だろう。つまりは、エロリ巨乳。

「……グウレイト」

親指を立てて最大限の賞賛と感謝の言葉を口にすると、幸は後ろ向きに倒れこんで気絶した。

暗くなった視界がぼやけながら明るくなってくる。そこに広がるのは、古戦場。

懐かしく思ったのはほんの一瞬。その瞬間には「ありえない」と脳髓が否定する。違和感が郷愁にも似た感覚を、危うく自分の意識を飲み込もうとした感覚を駆逐する。

ありえない。

記憶にあると思うその瞬間は机に面してマウスとキーボードを操っていたはずだ。デジタルデータの並んだ画面をアイボールセンサーで読み込み、脳みそというコンピュータで逐一処理して最適なコマンド攻撃していたはずだ。

だというのに、風の匂いと汗の二オイと、そして血の臭いを鮮明に思い出していた。三人称のはずだというのに、その光景を捉えているの視点が一人称だった。そしてただのデータだったはずのダメージは、「痛み」へと変わっていた。

それは息を切らせて疾駆する赤。オーガストはその右手に握りなれた剣バヨネットを持ち、地衣する種々を蹴り飛ばしながら進んで行く。その前には、ゆうに五十を超える岩塊が影を落としている。いや、特有の金属光沢と無骨で曖昧ながら四肢とも思える部位がある以上、見る者が見ればそれが人工物だと分かっただろう。それが形成される最中だと分かっただろう。事実、その彫像は見る見るとその形を洗練化していく。

ゴーレム。

それはヘブライ語で「胎児」の意味を持つ泥の人形のはずだ。だが黄金の体を持ち、見上げるよりも高い背丈のそれはどう見てもアニメのロボットにしか見えなかった。emethをmethに変えた所で倒せそうもない。装弾筒付翼安定徹甲弾そうだんとつぎよくあてていうこうだんか成形炸薬弾せいけいさくやくだんを打ち込んだほうがまだ効くだろう。

その群れに剣の一振りで突き進んでいく。馬鹿だ。馬鹿だと思えない。大馬鹿だ。その状況もさることながら、何のバックアップも受けていないし、仲間の一人も居はしない。

だが、オーガストは、幸は止まらない。

「■■■■■■■■■■ッ！！！」

彼がまさに一つの砲弾であるかのように。一発の銃弾であるかのように。群がるゴーレムを弾き押し退け切り刻み押し潰し、猿叫の様な声を上げて突き進む。

明確な攻撃だけではなく、突き崩した破片でも傷を追いながらも、グレートウォール居並ぶの鉄壁を切り抜ける。

その先には、人間に間違いのないシルエツトが。

いた。いたいたいたいた。いいいいいいいいあああああああああ
ああああああああああ！！！！

十七人。間違いはない。ローブやマントに身を包み、杖や錫杖やメイ
スを持つて。その姿は違えど、間違いはない。アルケミスト錬金術師だ。

あの鳩尾に、あの喉元に、あの頭蓋に剣を突き立てれば終わる。そう、それだけだ。抜けてしまえば、腕の一本、脚の一本も構わない。槍が刺さろうと、鎧を砕かれようと厭わない。これこそが戦いの愉悦。戦場の花。脳みそがアドレナリンの中で沸騰しているようだ。あとは突き立てるだけだ！嗜虐的な、狂った笑みが自然に浮かぶ。まずは誰にしようか。あの怯えと驚愕の表情を浮かべた女。「ひっ！？」悲鳴。アイツにしよう。視界の隅で、一人の男が構える。だが捨て置いた。あんな者は後でも構わない。

そして踏み出した瞬間。視界は原子の炎に埋め尽くされた。

轟音も衝撃波も、熱さも感じなかった。それよりも、急激に身体が冷え切っていくのが分かった。

それは、感覚を無くしていくということ。全身が潰され、半ばから炭化している。突き刺さったオリハルコン片は溶解し、目の前に突き刺さった愛剣も焼け焦げ元形をとどめていなかった。

わずかに残った金属光沢に映り込むのは、先の構えた男。金髪碧眼の錬金術師の顔だった。

そこで記憶の、記憶と思われるものの再生は終わった。またもや真つ暗になった視界の中で、血管の切れる音を聞いた。

「んああああ！き、急にそんなああっ……おっきい……んう、ん、ん、ううん、あっ、そこい……ん？……起きた？再び改めて、おはよう、お兄さん」

……胸糞悪い憤怒が、一気に萎えかけた。代わりに、別のものが勃ち上がりそうだった。否、勃ち上がっていた。

「な、な、何してんだお前！」

「あん！……もう、乱暴だとモテないよ、お兄さん？ まあ、多少抵抗してくれたほうが気持ちいいけど」

「そんな事はどうでもいい、は、離せ！！」

着ていたＴシャツをはだけさせられ、下半身にいたっては何も着ていない。その下半身に跨っていくもった声を上げている先ほどの少女。彼女が動いた際に、『何故かは分からないが』幸の身体に甘い快樂の波が押し寄せる。

気絶したと思ったら、女の子が……超能力とか魔法とか、そんなチャチなもんじゃない。これは恐らくは現実だ。ポルナレフも真つ青だ。

そんな状態から抜け出ようと見を擦れども、ほとんど運動などして

いなかった幸のガリガリな身体では身体の上に乗った少女すらかせない。それどころか、『何故かは分からないが』どんどん引きこまれていくようにすら感じる。

必死の抵抗さえも些細な快感に変えられてしまうという屈辱的な状況で、しかし何も知らない訳にもいかず身を振り続ける。まるで蟻地獄だ。無論双方の意味で。

「えゝ、本当にどいてもいいの？」

「……いいから退け！！」

「あ、今一瞬迷ったでしょ？」

「ッ！ー！う、五月蠅い五月蠅い五月蠅い！！」

年上の尊厳という、一応のちっぽけなプライドを傷つけられた幸。こうなったら一気に引き倒して抜け出すしか無い。そう思って、幸はその少ない筋肉に総動員を掛けて全身を攀じる。

「んんうあ！！……だから乱暴にしたらあ、はあ、ダメだつてばあ……まあ、もうあんまり関係ないかもしれないけどね。お兄さんは」

そして、逆効果。だが急制動に驚いたのか、跨った少女は『何故かは分からないが』背筋をピンっと伸ばして痙攣する。そして『何故かは分からないが』とろけた瞳とほおけた表情、甘い吐息でこう告げた。

「もう死んじやってるし」

「何を、言って」

「死んじやったんだよ、お兄さんは」

「死ん、だ……俺が」

「そう。お兄さんは死んじやったの。頭の中の血管が、プチってな
っちゃって」

抱きつき、耳元でそう囁く彼女。押し付けられた大きな胸が、圧力
に負けてその形を変えている。酷く甘い匂いが、その言葉と同じよ
うに幸の思考に侵食してくる。

そう。死んだのだ。何も成せないまま、無為に、無意味に、無価値
に。

どのみち、あの生活の果てには遠からず死があっただろう。不
健康不健全極まりないのだから。非生産的かつ、反社会的とも言え
る。

それでも。

それでも、口惜しい。

だって、そうじゃないか。

現実でも何もかも失敗したんだ。小中高と虐められて、大学入試に
も失敗して、そして結局は引きこもりだ。

逃避で始めたネットゲーム。

時間をかければ強くなれるし、そこでは力があれば何とかなった。
なのに、そこでも潰されて、駆逐されて、追放された。

何なんだよ。何なんだよ、いったい。何でこうなっちまうんだよ。

黒く熱い感情が、またもや彼を支配する。先ほどもまでの、明確な対
象のある憤怒とは違う。理不尽さを呪った、方向性のない怒りだ。
自らの行動というファクターを除外した、自分勝手な怒りとも言え
る。

その奔流に身を焦がしていると。

「だからね、おにいさん。お兄さんに、私がもう一回チャンスあげようと思うの」

耳元にもう一度。擦るような声が響いた。

「どういつ、意m」

「そのまんまの意味だよ、お兄さん。お兄さんに、もう一回人生をあげる」

死者の蘇生。ありえないことを、彼女は平然と、まるで簡単なことのように言う。

「だって私は、一応神様だから。そしてここは、まだここは曖昧な世界だから。そして」

自らを神と定める。ありえないことを、彼女は平然と、まるで簡単なことのように言う。

「そしてお兄さんが、強い感情の持ち主だから……んっ……だよ」

彼女は立ち上がる。空いた隙間のせいかな、幸は下半身が酷く冷たく感じた。

彼女のものなのかは分からないが、酷く淫靡な匂いが鼻を突く。

クラクラとしそうなまでの濃い臭気の中で、脳みそだけが高速回転しながら今の言葉の意味を噛み砕いていく。

生きかえる？ あ の「木山幸」に？

「いやだ」

あんな惨めな存在に。

「嫌なの？」

あんな、毎度目の覚めるたびに自分であることを絶望するような存在に。

「いやだ。あの自分に戻るのは、いやだ。嫌だ嫌だ嫌だ。嫌だ！！！！」

「そっか。じゃあ、お兄さん」

先ほどまでの、娼婦のような笑ではない。慈愛に満ちた、聖母のような、そんな笑み。彼女の細い指が、握りしめて、鬱血した幸の拳を優しく包みこむ。

しかしその無償のような愛のなかに、ほんの少し含まれた毒針に幸が気付くことはない。

「『オーガスト』に、なってみる？」

「オーガスト、に？」

「そう。オーガストに。選んで。このまま死んでしまい消え果てるか、それとも」

それは幸にとつて、願ってもないどころか最大の願望とも言えるような事項だった。

死んだらしいのであればどのみちもう蘇生は出来まい。もとより未練のない現世。それに比べて、いくら放逐された身であろうと、あれが彼の理想だったことは間違いない。

神様仏様ラヴクラフト様についてどうこう言えるほどの知識はないが、顧みる限り天国に行けるような行いはしていない。ならば。

「でもね、オーガストになるなら条件が有「飲んだ」……即決なんだね、お兄さん」

今度は驚かされたのは少女のほうだった。

「……そんな快諾されると、わざわざ寝こみを押し倒した意味がなくなっちゃうんだけど……わかった。さすがお兄さん。私が選んだだけはあるね。でも一応、説明だけはさせて」

幸の意思を汲み取ったのか、少女は丸くした目を再び細めて微笑む。本当ならば『既成事実』で幸を快楽の虜として使役するつもりだったのだが、その必要はなかったようだ。

そして細い指を三本立てて、右の手を幸の目の前に差し出した。

「条件は三つ。

まず一つ目。一番大事な条件。お兄さんの『復讐を完遂』する

こと。

次に、絶対に『怒り』を忘れないこと。絶対に。

そして最後の一つは、『成り果てる』こと。

期限はお兄さんが死んでしまうまで。よく考えてね、お兄さん。

『本当にコレでいい？』

「無論構わない」

そう告げながら、彼女は指を一本一本折り曲げる。説明しながら彼女の目が一瞬曇ったが、その事には幸は気付かない。いや、気付いていての結果は変わらなかっただろう。二の句を告げる前に頷く。今更どんな条件を提示されようとも構わないではないか。何を提示されようとも、幸の腹づもりは決まっていた。

考えなし、樂觀的と、そう思えるかもしれない。復讐を完遂するというのはわかる。世の理不尽を壊せばいい。為すがままに行えばいいのだ。

では怒りを忘れるとどうなるのか。成り果てるとはどういう意味か。普段なら取引の条件を吟味するはずだ。

だが今はそんな些末事よりも、一刻も早く『彼』になりたかった。

その為にも確認した。

「倒すのは、誰なんだ？」

「私をここに閉じ込めた奴の、その手先。具体的にはわかんない。

だからお兄さんに探してもらう必要があるんだ」

「……」

いきなりの難題だ。幸は、『New World』全体の規模を思い返す。一つの世界で、たった一人を探すのか？

だが、もしここで「そんな事は無理だ」などと言えばこの話もなく

なってしまうのではないか。そう思って身構える。

「でも大丈夫。その為の力までなら、あげるから。それ以外はもう、私にはなにもできないけれど」

そして彼女は三本の指を立てた左手をつきだした。

「こっちも三つ。」

一つは、お兄さんの『記録』を『記憶』にしてあげる。

一つは、お兄さんを最後に「オーガスト」だった状態にしてあげる。もちろん、怪我とかは治して、ね。

そして最後の一つは、お兄さんが怒りを忘れない限り戦えるようにしてあげる。

いいかな？わかった？」

一つ目。つまりは、今までのゲームでの行動が、三人称視点でただ斜め上から見ているだけだった、メッセージを読みキーボードで打ち返していたそのログが実体験きおくとなるということ。

それはすなわち、あの世界の冒険が自らの礎となるということ。四年半の間、まともな睡眠時間を確保した日は数える程もない。『消されて』しまうまで様々なことがあった。現実では到底叶わない愉悦が、躍動が、鼓動が。現実世界ではありえないような痛みが、苦しみ、死が。それが、入ってくるということ。

二つ目。つまりは、あの古戦場。人里離れた高難易度ダンジョンの奥まったフィールド。そこに横たわる軀から始まるということか。傷は癒え、恐らく愛剣も元に戻っているのだろう。

三つ目。良くはわからない。だが、朽ち果てるまで暴れられるということなのだろう。ならば、片っ端からあたりを付けて殺戮すればいいじゃないか。オーガストとは、そんな男だった。

「それだけあれば十分だ」

「分かったよ、お兄さん」

幸はそう答え、少女はそう応えた。

そして少女は幸を突き飛ばす。無重力空間を慣性で流される宇宙飛行士のように、彼は音もなく流されて行く。

二人の瞳は会ったまま、そらされない。幸にも、なんとなくだがこの後どうなるのかが分かった気がした。

ココから始まるのだ。そしてここかが別れなのだ。

そして。

ZORURURURURURURURURURURURU!!

奇妙な円柱の上方。幸と少女の頭上に黒い渦が生じた。渦と形容したのは、ちぎりと取られたような不恰好な空間の断片が揺らぎ回転しているように思えたから。そこから巨大な口が迫り出す。その奥は見える限り、乱杭のように黄ばんだ犬歯が並んでいる。それが猛スピードで幸に迫る。

さすがにそれは。

「大丈夫お兄さん！痛みのは一瞬で、すぐにそんなモノ感じなくなるから！」

「聞いてねーよッ、それはああああああああっ！！！！！！！！」

平泳ぎのように空間を掻いてみるも、もう身体は数センチも進まない。それを見て腹を抱えて笑う彼女。

先ほどまでの、若干シリアスな空気が台無しである。そして口に飲み込まれる寸前。再び彼女と目が合う。

——またね、お兄さん。『気持ちいいこと』の続きは、お兄さんが死んだあとでしてアゲル。何時になるかは分からないけどね。ああ、少し残念なお知らせ、かな？実はまだ挿入^{はい}ってないからね。擦れて合ってただけだから。じゃあね——

そんな事を瞬く間のアイコンタクトで伝えられた気がした。なんつー長いアイコンタクトだよ。と、ツツコミまで入れたと思う。そこまでは律儀に返したと思うのだが、生憎と記憶として定着する前に、木山幸の脳髄は乱杭歯にすりつぶされてその機能を失っていた。

「……知ってる空だ」

気がつけば、視界いっぱいには小雨散る曇天。その色合いも寒さも、知っていると云うより「覚えている」という方が正しい。そう。覚えていたのだ。ここが何処で、ここで何を倒し、どうして息絶えたのか。

今だに消化吸収されて再構築された感覚の抜け切らない身体で、オーガストは古戦場のほぼ中央にぶっ倒れていた。

互換が感じる情報が違う。もはや木山幸の身体じゃない。突き刺さった愛剣に映る姿は、自らの理想。燃える色の揺らぐ髪に筋肉質の

プロローグ（後書き）

ご意見、ご感想、その他もろもろの誤字脱字など、もし良ければお願いします。

その一（前書き）

一話分の展開は多分コレぐらいです。少ないでしょうが、できるだけ更新頻度を上げていきますのでどうか皆様ご容赦の程を。
あと、更新は土日以外は深夜になりますので、そこもどうかご容赦を……すみません。

その一

「ッッ！！！！伏せてっ！！！！」

陽光が鎧に反射したのを、ふと視界の端に捉えた。

並走する追手のうちの数名がクロスボウを射構えているのを見て、エリオは後ろの幌馬車に声をかける。

麻の幌を貫通して数本の弓矢が街道の脇の林に消えた。

「怪我は！？二ーナ！？」「大丈夫！！」

変わらぬトーンの妹^{ニーナ}の声を聞いて、一先ずは額の汗を拭う。額を拭う為に動かしたせいか、血の滲んだ二の腕がピリリと傷んだ。

エリオは馬車の速度を落とさずに考える。

幌馬車が、いや、ボロ馬車が悪路に悲鳴を上げる。だが、速度を落とすわけにもいかない。状況は極めて悪い。この街道は直線で、この積荷の少ない馬車は二頭立てだ。まだ速度で優っているからいいだが、あの峠から先は曲がりくねった道が続く。そこでは方向転換のために必然的に速度を落とさざるをえない。そうになると、追いつかれて捕まってしまうだろう。

退路を断つ様に浅いU字陣形で追って来られているため方向転換も出来やしない。これでは街に戻って自警団に助けてもらうこともできない。

最善の策としてはこのまま村まで逃げこむことだが、村人が総出で武器をとつても太刀打ち出来るかどうか……

今のうちに迎撃しようか。

―否。自衛用のクロスボウはあるが、こんな状況では、冒険者でも

ない彼女にろくに中てられるはずがない。

別方向に逃げる？

―無理だ。この先馬車の通れる道は殆ど無いから、どのみち此方にしか逃げられない。そうして、人気はどんどん無くなるだけ。助けなんてこない。

私がここで降りて、せめて二ーナだけでも逃がすか？

―ダメだ。あの子じゃまず馬車を運転できないし、第一私が降りてみたところで大して足止めできやしない。

どうする？どうする？八方塞がりだ。

じきに夜になる。このまま走らせれば馬たちも持たない。

どうする、どうする！？

「…………だりい、さみい…………おなかすいた」

背の高い、裸の針葉樹林。その合間を駆け抜けながらオーガストは周りを見回し探索していた。赤毛と褐色の肌が、非常に目立つ。

来たときは少しでもポーチの空き枠を作るために、別ウィンドウで攻略ウィキのマップページを開いてそれを辿って来た。それ故にマップをアイテムとして持ち合わせていなかったのだ。

彷徨うこと三日。ここ三日間の彼の移動方法は徒歩である。とはいっても、高級移動速度向上ポーションによって駿馬並の高速で移動している。古戦場を抜けるまではそうそう時間はかからなかった。高級移動速度向上ポーションによって、唯でさえ高い筋力パラメーターが上乘せされる。

それによって叩き出される高速度は快感だった。

もちろん初体験ではない。だが記憶としてというのがと実体験では天と地ほどの差があった。

だがそれも、最初の一日までだった。慣らし運転の要領で体の動きを記憶と一致させていく。

己を知らば、なんとやら。

全力疾走しながらの技の行使、アイテムやアビリティの使用。それだけで目測数十本が切り倒されていた。

問題はそれからだった。そうして疲れはててから気がついたのだ。空腹と、そして食料品などのアイテムを持ち合わせていないことに当たり前だ。いくら覚えていたとしてもそれは仮想の世界でのもの。記憶のなかに食事をしたシーンはない。

閑散とした深秋の針葉樹林。葉もどんぐりも落ちたそこはタンパク源も炭水化物も少ないわけで。

もとより有ったとしても、調理の経験も記憶も無いし、現代っ子である彼には食べられなかっただろうが。

というわけで、絶賛人里搜索中だったのである。

「……ないなあ……」

そうしながら三日三晩も走り続ければ、それはもう疲れるし飽きるというもので。

肉体的な疲れというのは意外と感じないが、空腹には耐え難い。

転送用アイテムを持っていなかったというのは、単純に「うっかり」だったとしか言えなかった。

一刻も早くアングルの街に、あの薄暗く混沌とした悪の街に戻りたかった。第一、ポーシヨンなど一部のアイテムも枯渇している。その分の補充も、あの街じゃなければできない。

そうやって黒い土と茶色い葉の上を歩き回ること更に二時間。

「ん？……あ、おお、おお！！！！」

やっと、人の匂いのする小道にたどり着いた。多少荒れているが、間違いなく人の手の入った街道。これを辿れば、間違いなく街が、それでなくとも村が有るはず！

夢中で駆け出し街道に飛び出す。ああ、文明の香りがする。これならば、人里も遠くはないはず。その有難味に酔いしれる。

「っしやあああああああ！！！！■■■■■ッ！！」

声にならない声まで上げて、両手を振り上げる。ははは、踊り出しそうだ。有頂天になって曇天を見上げる。脳裏に、何もかもかき消すような荘厳なファンファーレが鳴り響く。

それが不注意だった。

「ッ！！？ 退いて退いて退いてえ！！」

振り返る間も無く、街道の固く踏み固められた土にキスをする。
ニユールド

新世界での人間とのファーストコンタクトは、轢く轢かれるという衝撃的なものだった。

「ッ！！？ 退いて退いて退いてえ！！」

車は急には止まらない

まして、ブレーキもない馬車は咄嗟には止まらない。丸太を踏み越えた時のような衝撃を感じながら馬たちを制すると、幌の中から二ーナが飛び出してきた。幅広の帽子から綺麗な金色の髪が覗いている。

「姉さん！！」

「バカ、後ろにいなさい！私は大丈夫、何とも無いから！」

「きゃっ！」

御者席の姉が妹を幌に押しこむ。

そのせいで、塞がりかけていた傷口が開いた。ピリピリとする痛みに耐えながら手綱を引き、止まってしまった馬車をもう一度動かそうとする。

だが。

「おっと、待ってもらおうか姉ちゃん？」

「積んでる金と今押し込んだネーちゃん、頂いていこうかあ？」

下卑た笑いを浮かべた男が二人。進路は既に塞がれていた。

それどころか、馬車の周囲は追手に、馬に乗った山賊団に囲まれていた。

「離せ、離せよっ！ニーナっ！」

「きゃああああ！」

「ニーナアア！！」

地面に押し付けられたエリオ。頬も黒い髪も土で汚れている。その目の前で、幌馬車から妹が、ニーナが引つ張り出される。

「おう、やつぱり上玉じゃねーか、ああ？」

「へへ、良い身体だあ、高く売れるぜえ」

「ひうつ！？」

「おいおい手え出すなよ？商品価値が下がる」

姉と違って発育のいい胸を盗賊の一人が掴む。背後に両手を縛られない。恐怖と羞恥で体をこわばらせている彼女には身を擦ることしか出来ない。その拍子に彼女の頭に被さったつば広の帽子が落ちる。そこにあつたのは、人並み外れた流麗な美貌。そして。

「ニーナに触るなあああ！」

『^{エルフ}尖った耳』だった。

その一（後書き）

ご意見、ご感想、その他もろもろの誤字脱字など、もし良ければお願いします。

その二（前書き）

どこの戦争根絶作品（00ではなく、ガンガン出連載してたほう
よろしく、この作品はラヴアンドピースアンドヴァイオレンスで成
立しております。

もしくは、ラヴ（クラフト）アンドピース（クラフト）。

その二

——じゃあ、こっち剥いちまいますぜ？

——好きにしろ。そんなガキみたいな女はどうせ売れねえし、ヤッチまっても変わらない。

——へへ、じゃあ……

——や、やめ、キャアアあああああ！！！！

——姉さん！姉さあああん！

「へ、まったく。あんなガキみたいな女ひん剥いて何が楽しんだか……おい、サップ。何だそいつは？」

まだ生え揃ってもいないじゃないか。そんなような、自分の娘って言うてもおかしくないようなエリオの裸体を視界の端に捉えて、ゴツチは目を背けた。と、その視線の先には同僚がしゃがみこんでいる。

「ん？ああ、ゴツチ。なんか轢かれてたんだよお、こいつ。けっこー値の張りそうなモン着てっからよお、剥いで売っちまおうぜ？」

「お、いいな。兄貴達には？」

「もちろん言わねえ！」

「……だっはっはっはっは！！！！」

でっぴりと太ったサップと、それとは対照的にガリガリのゴツチ。二人はエリオやニーナには目もくれず、轢かれた長身の男に目を向けていた。

二人はしゃがんで、小声でそう呟きあう。豪快に笑っているように見せて、ここまでの会話も実は小声で行われていた。

無論、バレるのが怖いからである。

二人は、間違っても同性愛者ではないが、かと言ってあんな年端も行かない様な体型をひん剥いてイチモツおっ勃てる様な変態じゃない。

ならば日銭になるような稼ぎを狙って酒を買ったほうが利口というものだ。

さて、コイツから金目のモンを剥ぎ取るか。

何処の誰かは知らないが、こんな鎧を着てるなら結構な金目のモンを持っていそうだ。

そう思つて二人が物色しにかかるうとすると。

「ん?」「ああ?」

二人の足首をガツチリと掴む音がした。大の男の足の骨が、ギリギリと異音を上げて軋む。

「いぎやあああああああああ!!!!!!」

「ひぎ!!!!!!」

喚く二人の男の声に、残りの山賊のみならず侵されかけていたエリ才も、束縛された二ーナも啞然として視線を向けた。

「いぎゃ ああああああああ！……！」 「ひぎい い い い い

ヒットポイント的にはまったく減ってはいない。その辺りは、さすがオプシダンドラゴンスケイルメールセツト。さすがSグレード軽装備。回避率優先の組み合わせとは言え、その防御力は鎧と聞いてまず誰もが思い浮かべるであろう鋼鉄製のプレートアーマーなどとは文字通り桁が違う。

だが、軽装の鎧は動作を邪魔しない代わりに守る部分も少ない。

「い、いでえいでえいええええ……！」　「足が、脚がああ
あああああ……！！！！」

コレがゲームではちゃんと機能するのだが、生憎とこれは現実。馬車に轆かれて全身を強打すれば、それはもちろん覆われていない部分も打ち付けるわけで。非常に痛い。

「ああああああああああ！！！！！！」

オーガストは、まるでギャグマンガのキャラクターのような恰好で地面に突つ伏していた。彼の頭と背中にはくつきりとした轍が刻まれていた。そんな中、身体を変な男二人組にまさぐられていた。イカくさい手で、自慢の装備にベタベタと指紋を付けられた。怒りのボルテージに上昇していく。

だが同時に、嬉しさも込み上げていく。

不条理、理不尽を敵に回した身の上であるなだから。コレほど早く、コレほど迅速に、コレほど身近な、復讐のチャンスが巡ってくるとは。

いいだろう。やってやるのではないか。コレが復讐の第一歩だ。

現状を確認すると、自然と両手に力が入った。口からため息と一緒に、心境が漏れ出す。と同時に、沸騰したアドレナリンのなかに投げ込まれたように脳髓がトツプギアに入る。

交感神経が高ぶり、心臓の拍動数が急速に上昇し、身体が戦闘状態

に移行する。

そうだ。形振り構わず『気にせずに』さっさと憂さを晴らしてしまおう。さあ復讐だ。

「理不尽だ」

酷く痛む。特に顔面。やっとの思いで地面とのディープキスを振り切ると、付着したパラパラザラと砂粒と礫が落ちる。膝を立ててグイと腰を上げる。尻を突き出す形でみつともないが、握ったものを離さずに体制を立て直すにはコレしか無い。そこから曲げた足を前に出し、体の下にねじ込む。そしてそれ一本の力で身体を押し上げる。

「うおう！」「ぎゃ！」

オーガストの両腕に、ずしりとした重みを感じられた。体制が変われば手の位置も変わる。足首を取られ足元を掬われた二人が倒れたのだ。一人分の体重が片腕に掛かる。両腕で二人分。しかも喚き散らして抵抗しているので、かかる負荷はそれ以上だ。二人とも地面を手で掻いて逃げようとしているし、空いている片足で握る手を蹴り飛ばしている。

それでも、二人を拘束する手はビクともしない。それどころか、だんだんともる力が強まっていく。太い上腕が万力のように締まっていく。そして

ギリリ ミシリ

「お、俺（あじおで）の一足がああああ」「いてえよお、いてえいてえいてえええ」

更に一段と強く力を込める。鬱血した血管が破れる音が、筋繊維が潰れて骨がこすれあう感触が掌に伝わる。

喚くサップを、地面と水平になるように腕を伸ばして前に。叫ぶゴツチを、肩に乗せるように後ろに斜に。二人を、まるでいつも振るう双剣のように構える。

刀身が、いや身体が暴れるが『気にしない』。傷口から血が滴り持ちにくいが、『気にしない』。彼らの股間から漏れ出した液体は……『気にして』、少し体から離す。

そして改めてそれを持つて。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

オーガストは轢き逃げた張本人に向かって突撃した。

爆発音を轟かせ路面を抉り、オーガストの身体は加速する。
データス 力値としてみると、ソードマスターは決して素早くはない。
ジョブス 職業能

だが、彼の体感的には音速程度は振り切っているように感じた。その速さの中、沸騰した脳みそは冷静に現状を把握する。

立ちほだかる——正確に言えば進行方向に立っただけで邪魔を
するつもりはない——山賊たち。

その数は八人。見た目からしても屈強といえる。

特別鍛えてはいないようだが、生活の上で培われた、筋肉の上に多少の脂肪が乗っている実戦向きの体つきだ。

一瞥したところ、全て人間。^{ヒューマン} 着ているものは擦り切れと継ぎ接ぎが目立つが、総じて防寒に主眼が置かれた厚手のものだ。きっと、こういう家業故の防御力も考慮しているのだろう。

そんな、戦いを生業とする男たち。これならば、この程度ならば――
――抜けられる。

「くはくかは、くかはははっは！！邪魔だ、退け！！」

冷静にそう告げる。頭蓋同士が高速で打つかる音が鳴り響く。まず一人が崩れ落ちた。

双剣サップ & a m p ; ゴツチ。踏み込み、振り下ろされたサップの
その切っ先が山賊の頭に打ち付けられた音だった。

「ひぶう！」

ただでさえ強い筋力に太ったサップの体重と加速を上乗せした、重
い一撃。

と、同時に白い太いほうの剣から力が抜ける。それを見ていた黒く
細いほうが悲鳴をあげて更に抵抗するが『気にしない』。

「な、なんだあいつは！？」「知らねえよ、どこから現れた！？」

「ゴツチい！サップう！」

あと七人。それくらいならば、この急拵えの非人道的武装も持つだ
ろう。彼らの生死はともかくとして、実用可という意味で。

比較的離れた場所に立つ二人が弓を構えた。先の白豚打撃のために
動きが止まっているからだろう。オーガストはその即応性に感心す
る。頭目の様な男を始めとして、他の者などまだ剣すら抜いていな
いのに。

そんな事を確認するやいなや、風切り音を上げて矢が飛来する。

(ん？)

反応した。確認までした。が、それでもなお律儀に振り切った体制
から動かない自分の身体。

認識のギャップに戸惑いながらも、危なげ無く二本の矢を両方の剣
で絡めとる。彼はそこで、あることに気がついた。

肉に鏃が食い込む生々しい音と感触した。一応確認すると急所にあ
たっているのはゴツチだけ。喉に刺さった矢が脈と一緒に動いている。
応じて、オーガストの髪よりも赤い鮮血が辺りを濡らしている。恐
らくは動脈血。

一方の白はというと。厚い脂肪に刺さっているため出血は少ないが、
もし鏃に毒でも塗ってあればサップも危ないだろう。だが、そんな
些細なことは『気にしない』。

第二射を構えている間に、一挙手の距離にいた一人を黒い方の剣で殴り落とす。白い方に比べてこちらのほうが二十センチほどリーチが長い。その分、多少の遠心力を込めて振り下ろされる。

「なっ!？」

狙われた方もまさか振り下ろされる味方を剣で受けるわけにもいかず、どうしようかと悩む間に昏倒させられていた。初期装備で持たされそうな、しかし年季の入った鉄の剣がカランと音を立てて落ちる。

残り六人のうち、頭目を含めた四人は女の近くターゲットにいる。弓を持った二人は、十字砲火の出来るように左右に離れた場所にいる。

どちらにしても一投足で届く距離ではない。さて、どうするか。

脅威度は弓使いのほうが上。加えて、オーガストの気付いた仮説が正しければ固まった四人の相手には簡単だろう。

ならば遠距離から仕留める他はない。だが、生憎と下記のとくいも、遠距離攻撃得きるような魔法の一つも、オーガストは持ってはいない。

ならば飛ばせるものを飛ばせばいい。

ソードマスターがソードマスターである所以たるものを。

「つつつらあああああああ!!!」

やはり毒が塗ってあったのか。痙攣して口から泡を吐く白い巨体と急速に体温を失い出した黒い瘦身を、オーガストはその膂力に任せ、て振り切った。狙いは無論、二人の弓使いである。二つの切あたまっ先が、一定の速度を超えた時。

風切り音を上げて、紫電を纏った二本の斬撃が複合弓ごとその使用

者をぶつた切つた。

その二（後書き）

ご意見、ご感想、その他もろもろの誤字脱字など、もし良ければお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2720z/>

New World 外伝 『Another World』

2011年12月18日08時46分発行